

令和7年度第1回 市長と語ろう！

《テーマ》地域における防災意識・減災力の向上（南区）

《開催日》令和7年12月6日(土曜日)

《会場》横浜市六ツ川一丁目コミュニティハウス（南区）

《対話団体》南中学校地域防災拠点運営委員会・南中学校防災キャンプ実行委員会

《団体概要》

・地域防災拠点の開設・運営にあたり、きめ細かな役割分担の設定や、通信やトイレ設置、避難所スペース区割りなど、実務的なスキルの習得に向けて様々な訓練を実施しています。特に、避難所開設時の実効性を高めるために、避難所の各班長や運営委員を自治会町内会長が兼ねることを禁止するなど、先進的・特長的な避難所運営体制を設けています。

・令和4年度に南中学校防災キャンプ実行委員会を立ち上げ、発災時の共助に必要な地域のつながりづくりや、小中学生や保護者、地域住民の防災意識・減災力の向上を目的とした防災キャンプを企画して、令和5年度から実施しています。実際の避難所となる学校の体育館を使用し、防災ゲームなど多彩なプログラムを通じて、楽しみながら学べる体験型の防災教育を行っています。

〔注〕本議事録では、前後のあいさつ部分は「ですます調」、質疑応答・意見交換部分は簡潔化のため「である調」で統一し記載しています。また、文意を損なわない範囲で、重複部分や言い回しなどを整理しています。

■市長：あいさつ

皆さまこんにちは。今日は週末ですが、お時間いただきありがとうございます。皆さまと防災のお話をさせていただければと思います。

- ・毎年、市民意識調査で、市として防災の強化をしてほしいというご要望を非常に多くいただいています。
- ・大きな地震で記憶に新しいものといえば、阪神・淡路大震災があり、東日本大震災があり、また、熊本地震があり、近年では能登半島地震があり、また南海トラフを想起させるような大きな地震も起こっています。
- ・横浜市は来年度から中期計画の4年間、こういった取組を行っていくかに関する素案を水曜日に発表しました。これから4年間、横浜市政の中でどういう取組を強化していくのか、まだ案の段階ですが、その中で防災・減災に関する取組に力を入れたいと思っています。
- ・今日は、皆さまから実際の今までの体験をもとに、現状や課題、今後への期待を、意見交換させていただければと思います。
- ・南中学校の皆さまにも、参加していただいておりますので、具体的にどういうご意見を持っているのかをざっくばらんに教えていただければと思います。今日はよろしくお願いします。

■参加者より南中学校地域防災拠点の活動内容について説明。

（概要）南中学校地域防災拠点の対象となる自治会・町内会の紹介（六ツ川地区と南永田山王台地区の中の15自治会・町内会）や地域防災拠点運営委員会の特長（自治会・町内会長

は避難所の構成メンバーとの兼務ができない) など。

■質疑応答

市長：地域防災拠点の対象自治会数は。

参加者：南中学校の地域防災拠点エリアは、六ツ川地区連合自治会に属する 19 自治会・町内会のうち 10 組織、残りの 9 組織は 3 つの拠点に分かれている。南永田山王台連合自治会では 11 自治会・町内会のうち 5 組織が南中学校地域防災拠点の対象エリア。

市長：15 自治会・町内会が多い。

参加者：1 連合規模がちょうど南中学校の地域防災拠点。

地域防災拠点運営委員会は町会長たちと、避難所プラス 15 拠点の物資や予算など全体を取りまとめる。避難所の開設は町内会（地元）ではなく避難所に詰めることができる人が避難所を運営する体制を作っている。町内会の要職と分けていることが特徴である。発災直後の避難所の開設体制（3 グループ）も想定している。発災時のためにデジタル 5W トランシーバーを 80 台配備した。500 万円くらいかった。拠点が使うチャンネルをあらかじめ決めて通信訓練もしている。防災訓練の一例では、400 世帯 20 組に渡した、20 台のトランシーバーを使って 1 時間以内に全世帯の安否確認ができた。

地域防災拠点と学校の学区が異なっている場合が多いので、同じにしてもらえるとありがたい。避難所の受入れ人数も不足することが見込まれている。横浜市が自治会館などを避難所として認定したり、最低限の物資を入れたりしていただくことで地元も取組を進めやすい。

市長：地域防災拠点以外の場所に避難物資をいれるということか。

参加者：自治会館や賃貸のマンションで空いているところがいっぱいある。その中で使っているところを、市が避難所に使っているよと認定する制度があると、地元としてもお願いしやすい。また、地域のスーパーなど商業施設と連携していきたい。運営委員会は自治会と異なり、組織で契約・約束をすることが難しい。役所が間に入ってくると助かる。防災意識の啓発、自助・共助の意識で自分事と捉えるようにしていきたい。

■参加者より防災キャンプの活動内容について説明。

（概要）2 つの連合町内会の全世代の顔つなぎなどのため、「南区地域の力応援補助金」を使い防災をテーマとしたキャンプの実行委員会を立ち上げ、準備した。

■質疑応答

市長：補助金の申請は毎年か。

参加者：毎年。

市長：どうやってキャンプの参加者を集めているか。

参加者：難しい問題。町会にお願いするのもあるが子どもたちに直接届くのがよい。防災キャンプのチラシをつくって、二次元コードを読むと申込みができる。これを小中学校の掲示板に入れてもらって、お父さんお母さんに「行きたい」と話してもらう。30 人

の募集枠のところ、約 20 人の小学生が応募してくれた。防災キャンプでは、防災の話やゲームをして楽しさを味わってもらい、その後、寝床づくり体験などをする。子どもは楽しそう。停電を想定して電気を使わないご飯づくりも体験する。実際に体験することで地震ってこのようになるんだということを理解してもらう。

次の日は、防災運動会で心肺蘇生法訓練や、「助けて」など意思表示が大切なので一番大きい声を出した人が優勝する大声競争、担架搬送リレーなどで、遊びながら防災を学んでもらう。3年間実施して、全世代の顔つなぎやすぐに防災意識が変わるというものではないが、成果は上がっている。

市長：体験すると勉強になる。子どもたち（の参加者）は毎年変わるのか。

参加者：毎年変わるがリピーターが3年間で4、5人いる。楽しかったのだろう。

市長：（今日参加している中学生の）皆さまは参加しているのか。

参加者：今年度は、中学生には企画をしてもらっている。

参加者：楽しんでいる人もいれば、初めて経験してこんなに怖いのか、大変なのかなど知ることができた人もいるようだ。

市長：勉強になると思う。

参加者：今後は保護者も参加して知識を得てほしいと考えている。

自分の避難するところに泊まるということは非常に良い体験と思っているので、うちだけではなく他の地域防災拠点にも広げていきたいと思う。続けるためにもいろんな支援をいただけるとありがたい。他の地域防災拠点にも広げていただきたいと思う。

■意見交換

市長：地域防災拠点の運営体制を見直すきっかけをもう少しお尋ねしたい。

参加者：・東日本大震災の時に、神栖という茨城の臨海部へ出張に行っていた。6.5メートルの津波が来て、怖いので夕方まで発電所の上に避難していた。そのとき運営委員会の事務局をやっていた。当日は帰れず、戻った翌日に南中学校地域防災拠点の防災訓練だった。

- ・そのとき、皆さまと（拠点が）本当に機能するかと話した。発災直後は携帯も通じなかったので、まずトランシーバー（の活用を話した）。
- ・そして、組織図を確認すると、町会長や防災部長が避難所の運営メンバーに入っていた。町会長には地域を守る役割があるため、避難所運営に関わることは現実的ではないということで、15人の町会長に理解を求め、3年がかりで全員入れ替えた。皆さまの協力を得てやってきた。

市長：・横浜市として先ほど防災に力を入れていると言ったが、横浜は広いし世界的にも人口が多いが、横浜市の全ての市民のために地域防災拠点を設定している。

- ・地域防災拠点の備蓄が十分でなかったり、必ずしも市民のニーズを満たしきれていなかったりしたことが、市民の皆さまとのやりとりから明らかになった。
- ・地域防災拠点の拡充を中期計画に入れている。併せて体育館の空調や、トイレの洋式化のハード面の整備を、これから4年間、早いスピードで進めたい。
- ・給水拠点も、避難してすぐ水が出ないといけない。地域防災拠点の水道管は補強工事をしてすぐ水が出る環境を維持しようと思っている。

- ・参加者さんから指摘のあった地域防災拠点からこぼれ落ちた人をどうするかは、きちんと受け止めて、市役所で検討したい。
- ・スーパーとの連携に、区役所が間に入ることができるかもしれないので、という連携ができるか、事業者さんの考えもあると思うが、区役所としても支援させていただければ。
- ・広報・啓発は引き続きやっていきたい。

市長：今回の地域防災拠点の運営委員会に、連合町内会長の立場からの受け止め、どう進めるかをお尋ねしたい。

参加者：・市長からだいが話をさせていただいた。自分が話そうとしていたトイレや水道の話も出た。

- ・さらに地域防災拠点をブラッシュアップするためには、人の話を聞いていくことが重要。人の質を上げていくことをやらないといけない。
- ・トイレを外の仮設小屋に設営し、（使用する際は）拠点から外へ行かなくてはならない。高齢者など色々な人が利用することを考えると、できれば体育館に併設し、常設で普段は使わないが震災の時は使えるといい。
- ・煎餅布団で寝起きするのは高齢になると苦痛。できれば予算をつけてもらい、横浜発祥の（避難所で使う）ベッドを備えていただきたい。組立て式を用意しておくことが必要だと個人的に思う。
- ・（地域防災拠点に来ず）町内会に残った人も重要。色々な地形ごとの対策が重要。それぞれの会長たちが一番知っていると思う。それを活用して、この地区はこの取組が重点、ということを決めて取り組んだ方が良いと思っている。

市長：・トイレの方向性や避難所の環境向上をどう充実させていくかということは課題として認識しているので、しっかり進めたい。中期計画では、トイレの洋式化など防災拠点の整備をしっかりと進めていく方針。4年間で取り組んでいこうとしている。

・備蓄品を拡大すれば、就寝環境も良くすることにつながる。引き続き、検討していきたい。

参加者：市長がお見通しのところがたくさんあって、感心している。

市長：防災キャンプは地域の方々に自助共助の体制を作っていくうえで重要と思いながら聞いていた。3年間実施して手ごたえを感じられていると思う。先ほど発表の最後に今後のことも言っていたが、手ごたえや成果を含めて改めてどう感じたかをお尋ねしたい。

参加者：・手ごたえは、リピーターがあることや子どもたちが大変だと感じてくれたこと。

・今後は、他の拠点でやっても楽しいかなと思う。一から始めたが3年間やって枠組みが作れた。少し内容を変えたり、この段取りを違うステップにしたり、ブラッシュアップしたり違う拠点でも実施ができる。3年の成果として良かった。

市長：他の防災キャンプの実行委員会の方々の感想は。

参加者：参加者の子どもたちが（防災のことについて）「自分は知っているから有利だ」と言っていた。その時に手ごたえを感じた。

市長：キャンプを体験してどうすればいいのかがわかることが有利だと感じたのかもしれない。

参加者：・自分は3年間、メイン事業である初日のレクリエーションや運動会をやっていた。

- ・今の子どもたちはデジタル。インフラ・スマホがあって当たり前（な世代）。ダメになった時に何ができるか、色々なことを経験できればよい。
- ・例えば情報伝達。今年は、閉じ込められたらどう（外に）伝えるか、窓から紙飛行機を飛ばしたりした。電気がなければろうそくを使う。ツナ缶でろうそくを作ったが、マッチで（火が）つけられなかった。芯を上に向けるのもわからなかった。
- ・防災運動会では自分たちが学校でなかなかやらないことをした。バケツリレーや防災用品の借り物競争、障害物競走をした。子どもたちにとっては非常に新鮮で、遊びを通して防災をやることで、色々できた。
- ・担架リレーは、自分たちで人形を作って運ぶが、その前に消防団に担架の運び方を教えてもらった。
- ・3年目で種目を多く実施したが、時間内に終わり、子どもたちも大歓声だった。

市長：楽しみながら学べるのがいい。先ほどの感想にあった「有利だ」と思うのは学んでいく証拠だから。色々することが新鮮なのではと思う。実際の避難生活で重要になる。防災キャンプの実行委員の立場で3年間やってみての気づきをお尋ねしたい。子どもたちがこういうプログラムを経験して、知ったことで子どもたちなりに手ごたえを感じてくれたと思った。大人の目線からの防災キャンプをやってみての気づきは。

参加者：・リピーターもいて、規制をかけないで自由に寝床をつくらせるなど、危険な事以外は何でもやってよい。自由な発想でさせて、子どもたちの個性が寝床の体験で現れていた。

・中学生の参加がもう少しあったらと思う。

市長：小・中学生の参加の比率は。

参加者：・ばらばら。昨年は中学生が8人来ていたが、今年は2人参加した。

・バランスが難しい。中学生と小学生はやってもらう内容が違う。中学生は、参加より企画をしてもらった方が面白いと思っている。

参加者：・東京の荒川区は『防災部』が中学校10校全部にできた。

南中学校も防災塾という良い行事が1年に1回ある。子どもと自治会で防災マップを作ったり、被災地とつないだりしている。それを発展させて南中学校にも防災部があると良い。今後消防団の担い手につながってくればいいと思う。

・他の拠点でもキャンプに興味を示してくれるところが2、3あった。そういうところにつなげていければいいかなと思う。

市長：南中学校の生徒が本日参加してくれているが、実際に参加をしてみたい意見や自分の体験をどう生かしていきたいか。

参加者：南中学校では防災という取組をしていく中で防災意識を高め、こういう学習を通して、防災バッグを自分も準備するようになった。

市長：家庭では防災バッグはあったか。

参加者：・自分から親に伝えて準備し、知らなかった友人に広めていった。

・防災キャンプに参加して、自分が思っていたより小学生の参加が多く、防災の意識が高いのが素晴らしいと思った。

・中学生の参加が少ない。自分も含め、中学生ももう少し防災意識を高めていきたい。

参加者：・東日本大震災などの被害を考えると、防災キャンプに参加する人数が少なく感じた。災害を経験する人はたくさんいる。貴重な経験を自分から来て学習して広める人が少ない。もっと『広める、伝える、教える』行動を発展させるべきと思った。

参加者：・防災キャンプに参加して、防災について学校でもやって地域について関わることもあるが、今は学校内が多いので、地域と関わって経験できたのが良かった。

・東日本大震災の時は、0歳だったのでどんなものがわからない。経験していないので、防災についてのイメージが足りていない。

市長：イメージをわかせるために防災キャンプがとても有効だったし、手ごたえがあった印象だったと思う。

市長：防災キャンプを広めていくには、子どもだけではなく、大人も経験したい人がいるのでは。人手も大変だが、良い取組なので、広げられるといい。

参加者：・キャンプは、低学年は保護者も一緒に参加し、準備を手伝ってもらっている。2日目は近くの保護者が見に来てくれている。参加者から保護者へ広がっていく。各地域にも保護者を含めて広がっていく。

・キャンプを経験して感じたことを家族で話してもらおうと良い。そういったことで各自治会の意識が上がっていく。

市長：まさにボトムアップ。自治会長のキャンプの実行委員の立場ではどうか。

参加者：・親子キャンプの形はいい。

・防災がまだまだ自分事として浸透していないように思う。

・キャンプに子どもを参加させるにあたって、保護者の理解を得る必要がある。

・自治会の定例会では、防災のことを毎月議題にしている。心の準備をしてください、と伝えている。

市長：六ツ川地区連合自治会での、防災の取組に関する議論や議題をお尋ねしたい。

参加者：・自治会・連合は組織がしっかりしている。地域防災拠点は（災害が）起きた後の意識が強い。連合は（災害が）起きる前に減災に取り組み、起きたら拠点というすみ分けをしている。

・連合をまたがっていない自治会とも共助が必要。初期3日は情報共有をトランシーバーでしないと。連合としても初期で取り組まないと、という議論をしている。

市長：南永田山王台連合自治会ではどうか。

参加者：・11の単会があるが、うちの単会だけ南中学校防災拠点。

・火災が起こると始末に負えない。あと水の配給拠点をいっぱい作っておかないと。すぐ水はなくなってしまう。水がないと苦しい。水と火災は、連合と単会でもストックを重点項目として進めたいという話が出ている。そこを進めていきたい。

市長：・水については上下水道の耐震化をどれくらい進めるかが重要。しっかり緊急の給水栓をうまく作用するように進めていきたい。地域防災拠点から距離があるところもあるが、拠点の給水栓に関しては、きちんと機能するように4年間で進めたい。

・火災に関する課題も持ち帰ってしっかり議論する。

■市長あいさつ

- ・今回一番重要視しているのが、横浜市が災害に強いまちだと市民の皆さまに思っただけです。
- ・まずは普及啓発をきちんとしていきます。『本市としてもこれをやります、皆さまもこれをしてください』という積み重ねが、災害に強いまちだと思っただけの市民の皆さまの割合を1%でも上げていくことにつながると思います。
- ・中期計画としてしっかりまとめましたが、まだ皆さまのご意見を汲み取れていない部分もあります。引き続き、皆さまとの意見交換をしながら、横浜市として防災意識が高まっていく、災害に強いまちになるようにしていきます。
- ・皆さまお一人おひとりの取組の積み重ねが防災意識を上げます。皆さまと一緒に防災に関する啓発を進めていきたいと思います。